

もくじ 千住の狂歌師 関屋里元について 1P 表装としての「源氏香」- 村越向栄《双鶴図》- 2P
はい、文化財係です。6 (千住宿高札) 4P

足立史談

第610号

2018年12月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

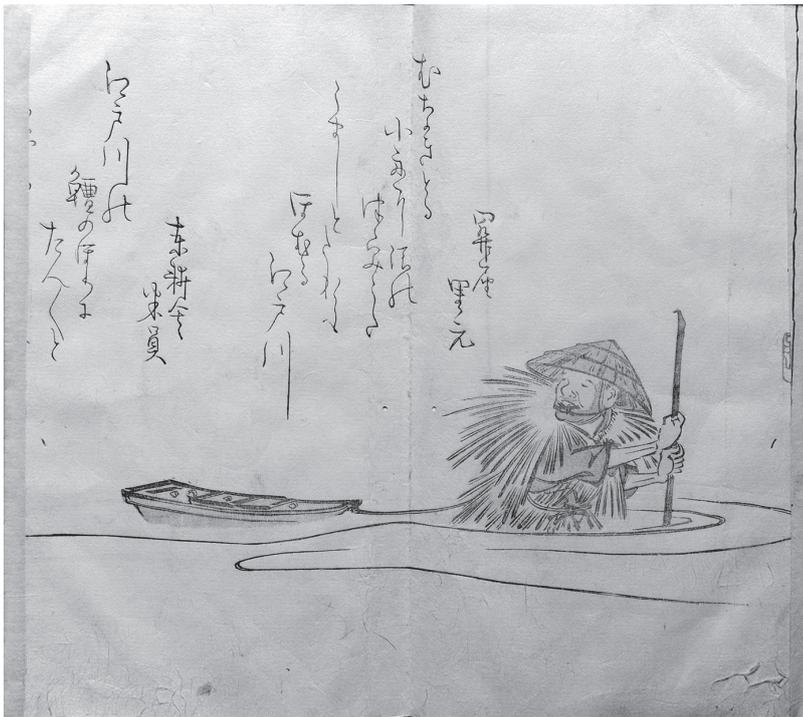
〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(30-309)



『縮図画冊』内 刷物 貼り付け (船津家美術資料・当館寄託)

現在、郷土博物館で開催している「大千住 美の系譜―酒井抱一から岡倉天心まで―」展には、関屋里元という人物の狂歌短冊などが展示されています。関屋里元については、まだ分からないことが多く、分かっていることといえば、名を橋本立、または春朝と言い、関屋の里

千住の狂歌師 関屋里元について

(大千住展図録原稿補遺)

山崎 尚之

■松津文洩の『縮図画冊』
平成二八年に開催した展覧会「美と知性の宝庫 足立―酒井抱一・谷文晁とその弟子たち―」展で、大きく取り上げた江北の旧家である船津家の江戸時代後期の頃の当主である船津久五郎重許は、谷文晁に弟子入りし「文洩」「葉菴」という画号を許された絵師でもありました。文洩は、当時の絵師の練習方法として、また、絵の注文を受けたときに参照するために、師匠である谷文晁やそのほかの絵師の絵をたくさん模写していました。そのようなものの中に『縮図画冊』全六冊があり、谷文晁の絵を小さく模写したものがたくさん描かれています。この『縮図

(現在の千住関屋町から墨田区堤通辺り)に住んでいたこと、天保二(一八三一)年に数え年四〇歳で亡くなったこと、そこから逆算して寛政四(一七九二)年の生まれということ、里元という名は父親のあざなを継いだことくらいです。千住掃部宿(現在の千住仲町)にはかつて橋本家という旧家(商家)が存在していて関屋の里に広い土地を持っていたらしいとのことですから、関屋里元こと橋本立もその橋本家の人なのではないかと思われま

す。
画冊』の中には刷物と思われるもの一部を切り取ったものが貼り付けられていて、そのような貼り付けられたもののひとつに関屋里元の狂歌とそれに関連する絵(挿絵)があります。里元の狂歌は、「むなき(うなぎ)と小舟に浪の つらみうた うましとたれも ほむる江戸川」とあります。その下にある絵には、菅笠をかぶった男の人が縄で小舟を引きつうなぎかきでうなぎを獲っているところが描かれています。残念ながら、『縮図画冊』の大きさに納まるように切り取られてしまったため、絵師の名前はわかりません。関屋里元については残っている狂歌も少なくよくわかっていないので、偶然とはいえこのような形でも詠んだ狂歌が残っていることは珍しいことです。
■狂歌の友人 東耕舎米員
ところで、この『縮図画冊』に貼られた、切り取られた刷物の一部には、関屋里元と一緒に東耕舎米員という人の狂歌の一部も載っています。それは、「江戸川の 鰻のほりに たんたんと(以下欠落)」というもので、関屋里元の狂歌と共に「江戸川のうなぎ」についてのものとなっています。たぶん、「江戸川のうなぎ」という題をもたせて狂歌を詠むようにということだったのであろうと思われる。(ちなみに、ここで詠まれている「江戸川」は、現在の千葉県と東京都の境とな

っている江戸川ではなく、神田川の新宿区西早稲田辺りから飯田橋までの間を「江戸川」と呼んでいた、その「江戸川」ではないかと思われる。この東耕舎米員は、『縮図画冊』に貼られた切り取られた刷物では、ただ関屋里元の隣に狂歌が載せられているように見えますが、関屋里元が亡くなった翌年に当る天保三(一八三二)年に出された『関屋里元追善集』(名倉家資料 当館寄託)という関屋里元の逝去を悼む多色摺版画の絵を入れた豪華な狂歌・川柳集の緒言の中に「東耕舎：かきあつめてひとまきとなせり」とあり、この冊子の編者をしてることからすると、ともに狂歌を詠む友人であったのではないかと思われます。

■絵師鈴木其一の交友

また、今回の「大千住」展で初めて紹介された『狂歌葦芽集』(きよわかあしかびしゅう 国立国会図書館蔵)は、関屋里元が撰者となった狂歌を載せた版本ですが、その中に掲載されている鈴木其一の絵は、後の鈴木其一の活躍を準備するものの表出のひとつと取れるだろうと言われています。関屋里元と鈴木其一は、その他にも『小督局・源仲国図』(船津家美術資料 当館寄託)でもコンビで作品を残しています。このようなことからすると、関屋里元は絵師・鈴木其一に近い関係にあり、親しく

作品への絵の制作を依頼できる立場にあったと思われる。また、関屋里元は関屋に土地を持つような千住の旧家(商家)の人なので裕福であり、若い鈴木其一に対して何らかのサポートもできたのではないかと思われる。

■里元の狂歌

最後に、あまり残っていない関屋里元の狂歌ですが、現在、刊行されている書籍の中にもありましたので、こちらの方を紹介いたします。こちらの方が人の目に触れやすいものなので、それを紹介するというのもおかしな話ですが、関屋里元については、その来歴を記したような資料・書物が先の『追善集』や『葦芽集』の中の緒言くらいしかないもので、さらにいくらかでも知っていただくためには、これらを掲載することも有益なのではと思います。

里元の狂歌が掲載されている書物は、『狂歌関東百題集』(文化一〇・一八―三三年)鈍々亭和樽編(『江戸狂歌本選集』第八巻 東京堂出版 二〇〇〇・八・二五)です。

「反古張の障子に雁の影さして
ひたり文字をも 見する北窓」
「賤の男か うてをみかきて 刈小田に
たわしのことく 残る稲かな」
「夜もすから 解ぬ水を ふみつけに
中むつましき 岸のをし鳥」

(郷土博物館 専門員)

表装としての「源氏香」 ―村越向栄《双鶴図》―

郷土博物館で開催中の展覧会「大千住 美の系譜―酒井抱一から岡倉天心まで―」では、千住の名倉家に伝来した約一八〇点にのぼる作品・資料を紹介しています。その中には、床の間に掛けて鑑賞する「掛軸」があり、足立ゆかりの画家である村越向栄の《月次景物図》をはじめ、多くの掛軸を展示しています。

さて、皆様は掛軸をご覧になる時、描かれた「画(え)」や「書」の周りを縁取る「表装」をじっくり見たことがあるでしょうか。「表装」とは、一般には鑑賞・保存のために書や画の本紙(書画を描いた紙本、絹本)を掛軸や卷子、屏風等の形態へと仕立てることを指し、またそれによって構築された裂地(きれじ)等の全体構造のことでもあります。表装の

中でも、掛軸の本紙の周辺を彩る表装裂(ひょうそうぎれ)を選択する際、表装師は書画の品格や表装形式、掛けられる場所や意向、画の色彩等に見合うものを選びます。さらに画の内容の意味合いを考え、それに合う表装裂を選択する場合もあります。今回は、その様な表装の表装裂に着目して村越向栄《双鶴図》(当館蔵)の掛軸をご紹介します。

■村越向栄《双鶴図》

村越向栄は、酒井抱一の高弟・鈴木其一の門人、村越其栄の子であり、千住で活動した足立を代表する画家の一人です。慶応三年(一八六七)に父・其栄が亡くなるとすぐに其栄の寺子屋「東耕堂」を引き継いで塾主となり、第一回・二回内国絵画共進会において東京の「光琳派」画家として作品を出品した経歴を持ちます。(千住の琳派―村越其栄・向栄父子の画業―『足立区立郷土博物館』二〇一一年)

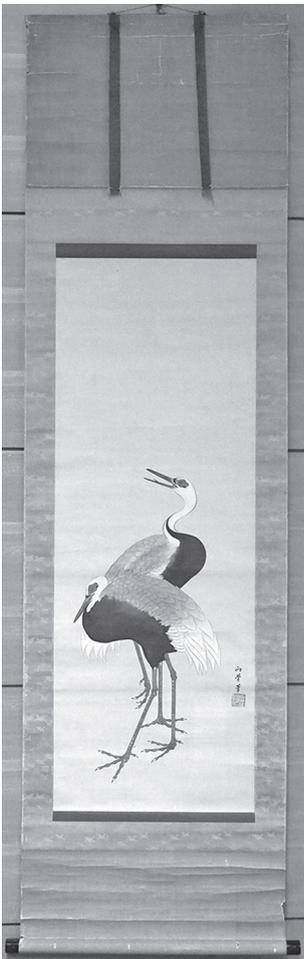


写真1 村越向栄《双鶴図》、明治時代、絹本着色、一幅、内寸112.1×40.3、外寸189.5×52.7

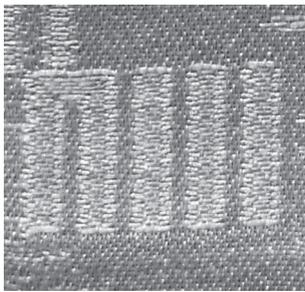


写真2 源氏香(第九帖・葵)

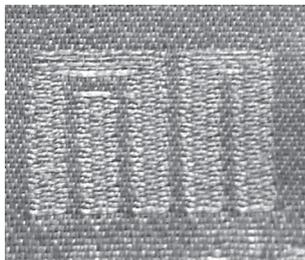


写真3 源氏香(第三十五帖・若葉下)

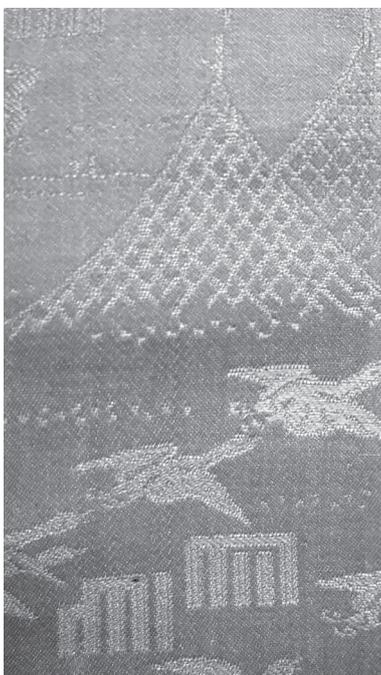


写真4 網干文様、水鳥の群れ、源氏香(右:第三十五帖・東屋、左:源氏香を真似たもの)

今回ご紹介する向栄の掛軸(写真1)には、絹本に二羽の鶴が精到な筆致で描かれています。鶴の図像は、「鶴は千年、亀は万年」と言われるように古来より長寿や吉祥の象徴と表され、日本画の伝統的な画題の一つとして親しまれてきました。向栄が描いた鶴は、体が灰色で頭頂から頸部(けいぶ)にかけて白く、目元が赤い特徴があることから、「マナヅル」であることがわかります。このマナヅルは、シベリア南東部などで繁殖し、日本に冬鳥として渡来します。頭部が赤いタンチョウヅルと共に、新年や長寿を祝す掛軸として描かれる例が多く見られます。この向栄の《双鶴図》の掛軸も、主に新年の床の間を彩るものであると考えられます。

干(あぼし)文様」が丁寧に縫われています。(写真2・4)。この「源氏香」とは、『源氏物語』に典拠を置いて、組香(香りを聞き分ける遊び)の表現を縦五本の線を基本として構成された図形の模様です。この組香では香五種を用いて、同香か別香かを作図で答えます。横線で繋げられたものが同香を意味し、繋がりのない縦線はそれぞれが別香であることを示します。この図型は五つの線の組み合わせで五十二型が作られ、『源氏物語』五十四巻のうち、第一帖の「桐壺」と第五十四帖の「夢浮橋」の巻を除いた五十二巻にあてはめられています。「源氏香」の図柄は、元禄頃から小袖の模様を用いられ、また、江戸後期の読本『修紫田舎源氏』を題材にした浮世絵「源氏絵」等にも広く調度品や美術品の模様として使われています。一方、この「源氏香」と共に織られた「網干」は、魚を獲る網を干した様子を

描いた文様で、浪や水鳥などと組み合わせられ、海辺の景色を表します。この向栄の掛軸の表装には、「源氏香」と思われる模様が四種類あり、第九帖「葵」、第三十五帖「若葉・下」、第五十帖「東屋」と、残りの一つは、第十二帖の「須磨」や第二十三帖「初音」等と形が似ているものの、線の形が異なり、判別はつきませんでした。しかし、ここでは一つ一つの帖を表すものではなく、『源氏物語』を意味するものと考えられます。そして『源氏物語』の中から「網干」が意味する海辺の情景が書かれた場面を探すと、源氏自ら須磨への退去を決意し、自身の転機ともなった第十二帖「須磨」と第十三帖の「明石」が挙げられます。この二つの帖の中からこの裂に織り込まれているような水鳥の群れが登場する場面や和歌が記されているかどうかを調べると、第十二帖「須磨」の第四章の第一段「須磨で新年を迎える」の中に、

水鳥である雁と鶴の群れについての和歌が確認できます。

「故郷をいづれの春か行きて見む
うらやましきは帰る雁がね」

「あかなくに雁の常世を立ち別れ
花の都に道や惑はむ」

「雲近く飛び交ふ鶴も空に見よ
我は春日の曇りなき身ぞ」

つまり、この表装は網干文様が織り込まれていることから『源氏物語』の海辺の場面であることを示し、さらに網干と共に水鳥の群れが織り込まれていることにより、水鳥の群れが出てくる「須磨で新年を迎える」場面を表していると推察できます。

この様に、光源氏にとって大きな転機となった第十二帖「須磨」の中の「須磨で新年を迎える」場面を表したと見られる裂を用いたこの表装は、本紙に描かれたマナヅルが新年を祝す意味を持つことから、正月用の掛軸として仕立てられたものであることが推測できます。

今回ご紹介したように、掛軸の表装は画から汲み取ったものを選び、描かれた画との兼ね合いによって彩られている場合もあります。今後、展覧会などで掛軸をご覧になる際は、画だけではなく、表装と共に併せて読み解きながらご覧いただくのも面白いと思います。

(郷土博物館 専門員 畑江麻里)



千住宿高札（慶応四年大総督府参謀布告）郷土博物館所蔵
 ※郷土博物館ホームページのオープンデータで高精細で見ることができます。
http://jmapps.ne.jp/adachitokyo/det.html?data_id=14951



はい、文化財係です。6
千住宿高札
 （慶応四年大総督府参謀布告）

今年、慶応四年（一八六八）七月十七日に江戸を東京と改めてからちようど百五十年の節目の年に当たります。これを記念して、郷土博物館では、夏に「幕末明治の名筆」と題した企画展を開催しました。企画

展では、足立区の文化財に登録されている慶応四年（一六八六）五月付の千住宿高札（慶応四年大総督府参謀布告）（以下、参謀布告と略す）も展示されました。これは江戸が東京になる直前のもので、千住宿に数多く掲げられた高札の最後を飾ったものです。今回は、この参謀布告についてご紹介いたします。

■高札とは

現代では、政府が国民に新しい法律や政策を伝えるのは、テレビや新聞、インターネットなど様々な手段がありますが、江戸時代には天下の往来に木製の札を掲げて民衆に知らせていました。この木製の札を皆に見えるように高く掲げたことから高札と呼ばれる、高札を掲げる場所は、人通りの多い町や村の出入り口に設けられ、高札場と呼ばれていました。千住宿の高札場は、千住ほんちよう商店街の南詰を出て、信号を渡ったところ（千住仲町一八一―一付近）にありました。立っていた場所には「千住宿高札場跡」という標柱があります。

参謀布告も横一・八二m、縦〇・六mという大きさで、人目を引いたことでしょう。

■幕末の政情と大総督府

慶応三年十月十四日、徳川慶喜は政権を朝廷に返上すると表明（大政奉還）しますが、慶応四年一月にな

ると、旧幕府と新政府の間で戊辰戦争が始まります。新政府は、二月九日に江戸城攻略のため東征大総督府を設置し、有栖川宮熾仁親王（ありすがわのみやたるひとしんのう）を東征大総督とし、西郷隆盛を参謀の一人に任命します。参謀布告はこの東征大総督府が出したものです。

三月十一日に江戸に入った西郷隆盛は、三月十五日に江戸城総攻撃をする予定でした。こうした状況の中、三月十四日には旧幕府方の彰義隊が千住宿に偵察に来ています。ところが、まさにその日、旧幕府方の勝海舟と西郷隆盛が会談し、江戸城の無血開城が決まります。そして、四月十一日に江戸城は無血開城し、四月二十一日に有栖川宮熾仁親王が江戸城に入城します。

江戸城が開城しても旧幕臣の中には新政府に抵抗する者が多くいました。五月十五日には彰義隊と新政府軍が上野（台東区）を舞台に衝突し、新政府軍が彰義隊をその日のうちに鎮圧します（上野戦争）。

■参謀布告の内容

参謀布告が出されたのは、上野戦争の翌日のことでした。高札には次のようなことが記されています。

徳川慶喜が新政府に恭順する意向を表明したので、先祖の功績に免じて、徳川家の存続を認める。これは徳川家に従う末端

の者までもが困らないようにするためであるのに、心得違いの者がこうしたことを考えもせず、新政府に抵抗するため略奪や兇暴なことをしており、一般の民が苦しんでいる。そのためやむを得ず凶暴なことをする者たちを鎮圧した。これは天下を平和にするためである。こうした新政府の意を理解し、一般の民は各々の生業に精を出すように。

新政府軍は、同日付でもう一枚千住宿に高札を与えており、そこには彰義隊士をかくまうことなどを禁止する内容が書いてありました。あわせて参謀布告は、民が新政府の統治に従うように大義が新政府にあることを宣言しています。長年見慣れた幕府の高札とは違う新政府の高札を見た千住宿の人々の心境はどのようなものだったのでしょうか。

■新時代の到来

江戸が東京に改められたのは、まだ戊辰戦争が続いている最中のことでした。戦争の舞台は東北方面に移っていきます。そして、九月には慶応から明治に改元され、翌明治二年五月に戊辰戦争は終結します。

参謀布告は、こうした激動の時代の生き証人なのです。
 （文化財係 学芸員 佐藤貴浩）